アマリリス
Amaryllis
静岡県立美術館ニュース
THE JOURNAL OF SHIZUOKA PREFECTURAL MUSEUM OF ART

狩野典信（一七三〇―一七九〇）
山水図（以古図）
一七六二―一七八〇（宝暦一二―安永九）年
絹本墨画金泥引
一一八・〇×四四・一㎝

山水画においては、画中に小さく描かれた人物が、我々鑑賞者を絵の中の世界へと誘う役割を果たしている。本作では画面前景の松樹の下と崖下に、また中景の坂道と東屋の中に、計七人の高士と童子を描き、彼らの顔や体の向き、山崖沿いに続く小径の案内によって、私たちは山中を辿ることができる。水に浮かぶ小禽や岩肌を横目に、気が付けばはるか上空から流れ落ちる滝を見上げている。そうした明快な視線の導きと構築的な画面構成が本図の特徴である。

狩野典信は木挽町家六代目当主。本作の図様の典拠は、室町時代に狩野派の基礎を築いた狩野元信の真体山水画にあり、同図様は典信の孫に当たる狩野栄信周辺でもしばしば引用されていたことが指摘されている。江戸狩野派の当主として規範を継承しながらも、丸みを帯びた岩の輪郭線や執拗に描き込まれた皴に個性が光る作品である。

（学芸課非常勤職員　大橋香奈子）

No.
152
2023年度｜冬｜

いくつもの境界線をまたいだ旅

館長　木下 直之

某月某日　菊池恵楓園訪問

市内から熊本電鉄で三〇分ほど揺られ、終点の御代志駅に降り立つと、そこはすでに菊池恵楓園の中でした。門もなく（別の場所に正門はある）、塀もなく（歴史遺産として一部保存か）、最初に目に止まったものは一般向けの保育園だったのです。隔離施設と思い込んでいただけに驚きました。

もちろん、国立療養所が国のハンセン病政策に基づき「絶対隔離」にして「生涯隔離」を求めた施設であったことは疑いようのない事実です。そのことに国の責任を問い、国家賠償を求めた裁判は熊本地裁に起こされました（二〇〇一年勝訴）。その結果、〇八年に「ハンセン病問題の解決の促進に関する法律」が成立、「名誉の回復及び死没者の追悼」を定める第一八条に基づいて、各療養所に資料館が建設されました。

入所者の高齢化が進む一方、療養所は地域に開かれつつあるようです。隔離のためでもあった緑豊かな広大な敷地が、文字どおり「公園」と化すかもしれません。

恵楓園の油絵クラブ金陽会のみなさんの絵が当館に展示されたのは一年前の「みる誕生―鴻池朋子展」でした。当時は、それを鴻池さんが望んだからだと答えれば済んだのですが、改めて、ハンセン病元患者の絵が美術館に並んだことの意味を考えたいと思い、現地を訪れたのです。

あの展示が美術館の新たな一歩だとしたら、これまでの美術館は何を基準に展示の可否を決めてきたのか、その境界線はどこかという問いが生じます。

金陽会会員は元患者であって障害者ではありません。しかし、末梢神経を失う結果として障害を負うことが多い。おりしも先の法律と同じ〇八年に「障害者の文化芸術活動の推進に関する法律」が制定され、障害者と健常者の表現を同じステージで見る環境が整いつつあります。

いわゆる「障害者アート」が語られる時によく耳にする境界線は、「正規の美術教育を受けていない」という一線です。すると、「正規の美術教育」とは何かが問われますね。

某月某日　無言館訪問

信州上田にある無言館は、「戦没画学生慰霊美術館」を自称するとおり、戦争で死んだ画学生が遺していった絵や彫刻を集めた美術館です。

先の境界線を持ち出すならば、美大に学んだ画学生たちは明らかに「正規の美術教育を受けた」側にあるわけですが、すると今度は、彼らの描きかけの、あるいは未完成の絵を美術館に並べることの是非が問われます。来秋、当館では「無言館と、かつてありし信濃デッサン館展」を開催し、この問題を投げかけたいと思います。この話は後日また。

某月某日　ねむの木村訪問

掛川駅から車で二〇分ほど走った山中にあります。深い山ではないのに、まるで日本を離れ、宮城まりこさんによって建設された独立国を訪れたような印象でした。いや、村を自称していますから、独立村というべきでしょう。肢体不自由児養護施設ねむの木学園の一九六八年の出発時から、絵を描くことをそこでの暮らしの大切な一部としてきました。ケアとアートを結んだとても早い実践です。今では、村内にふたつの美術館「緑の中」と「どんぐり」があります。前者は坂茂、後者は藤森照信の設計になるユニークな建物です。

宮城さんは「障害者」という言葉を嫌ったようです。障害者と健常者の間に引かれた境界線こそ再考すべき一線でしょう。

いくつもの境界線をたどりつつ、それらをまたぐ私の旅は、こんなふうにまだ始まったばかりです。

知の探究を続けること―静岡県美の8年間

神戸大学大学院人文学研究科専任講師　野田麻美

今年の三月に退職し、あっという間に半年以上が経ちました。この原稿がアマリリスに掲載される時期には、もう今年も暮れです。今年の四月に神戸大学の教員となり、毎週講義やゼミの準備に追われつつ、当館の客員学芸員として、十月に始まる「大大名の名宝―永青文庫×静岡県美の狩野派」展の図録原稿執筆や作品の拝借、展示などの準備をする日々を過ごしてきました。それと併行して、今年三月に東京大学に提出した博士論文の修正作業も行い、この原稿を書いている十一月に至るまで、心身ともに休まる時がほとんどありませんでした。この半年間、この三つ以外のシンポジウムや原稿依頼などの仕事はほぼ断り、神戸大学でお願いされた教員紹介の原稿すら、時間がなくて書きませんでした。九月末に「大大名の名宝」展の作品拝借の最中、熊本のホテルから博論の再提出を行い、「大大名の名宝」展の展示と開幕、展示替えをして、極限状態が収束したものの、作品のご返納が終わり、年内いっぱいとなる、当館の客員学芸員の契約期間が終了するまで、正直なところ、当館にいた八年間を振り返る気持ちにはなれません。

桃山時代の狩野派について勉強していた学生時代から、狩野派の素晴らしいコレクションを擁する当館にあこがれ、五年間勤めた群馬県立近代美術館より転職し、当館に着任した二〇一五年の春、当館の狩野派作品を間近で見られて、しみじみと、美術史の勉強をしてきて良かった、と思いました。翌年秋の、芳賀徹・前館長渾身の「徳川の平和」展（当館の三十周年記念展でもありました）を担当することになり、着任した四月から展覧会準備に明け暮れ、二〇一六年に続き、二〇一七年（「美しき庭園画の世界―江戸絵画にみる現実の理想郷」）、二〇一八年（「幕末狩野派展」）と、立て続けに展覧会を企画、担当しました。庭園画展、幕末狩野派展は、いずれも構想を五年以上かけて作り上げた展覧会でしたが、連年展覧会の出陳交渉や担当に追われ、この時期、当館のコレクションや仕事とじっくり向き合う機会は少なかったように思います。その後、館の仕事をしつつ、ご寄託を受けた日照軒コレクションの研究を進め、「忘れられた江戸絵画史の本流―江戸狩野派の250年」・「江戸狩野派の古典学習―その基盤と広がり」展を二〇二一年に開催しました。この時期に、さまざまな館の仕事ができたことは、今になると、かけがえのない体験だったと思います。

こうして八年間のことを書いても、その時々に必死だったこともあり、やはりまだ当館に奉職した時期を総括することは難しそうです。ですが、一つ言えることは、これほど濃密な八年間は、自分の人生でも空前絶後だろうということです。この間、当館のコレクションを含め、数多の作品と出会い、学芸員としてこの上ない幸せな時間を過ごすことができました。また、その出会いで得た感動や、作品の魅力をより深く知るために研究を重ねた成果を皆様にお届けするため、いくつもの展覧会に携わることができ、学芸員としてのみならず、研究者としても大きく成長できたように思います。静岡県美の素晴らしいところは、そうした作品との出会いの場がたくさんあり、またその研究を勧めてくれる環境が整っている点です。展覧会準備にあけくれると、どうしても作品を調べる時間が減ってきて、たくさんの作品に出会い、感動した「まま」放置してしまいがちです。ですが、当館では、学芸員の研究会が毎月開催され、各々の研究成果が発表されます。歴代館長はこの研究会の継続に力を入れ、研究を後押ししてくれます。こうした体制はどこの美術館にもあるものではなく（むしろ希少です）、日々、学芸業務に追われ、研究が疎かになりがちな私たちに、研究者としての成長を促してくれます。思えば、そうした環境のなか、「忘れられた江戸絵画史の本流」・「江戸狩野派の古典学習」展までに書き溜めた江戸狩野派に関する論文を基に、当館の江戸狩野派作品について博論を執筆することを志し、木下直之館長や石上充代学芸課長はじめ、館の皆様に応援いただき、二〇二二年四月に東京大学に再入学し、博論の執筆に挑みました。

私は、数多くの作品と出会い、それを調べるという、知の探究を、開館以来、貪欲に続けている当館で働けたことを、心から誇りに思っています。人はだれしも好奇心を持ち、何かを調べることに熱中する時があります。しかしながら、いずれその熱は冷め、好奇心は仕事と日常のなかに埋没していきます。好奇心を保ち、調べる作業を長年継続することは、実に困難です。当館には、それを続ける大切さを知る学芸員、館長が居て、代々その伝統が引き継がれていると思います。

ちょうど、この原稿を書き始めた数日前に、博士号が授与されました。静岡県美の江戸狩野派作品の素晴らしさを、世界中の人に伝えたい。そのために、それらの作品を核とした博論を執筆し、書籍を刊行するという野心を燃やし、学芸業務に携わるなかで、博論のための時間を捻出し、執筆を続けました。博論の刊行前に転職となってしまいましたが、その夢は、これから実現に向けて続いていきます。素晴らしい作品と向き合い、その魅力を多くの人に伝えるために、作品について調べ続けること。当館で学んだその継続の大切さを、後進の指導においても伝えていきたいと思います。

企画展

天地耕作（あまつちこうさく）
初源への道行き

2024年２月10日（土）～３月27日（水）

天地耕作は、村上誠と渡の兄弟と、山本裕司の三名による美術制作のプロジェクトです。この度、美術館では初となる、天地耕作の個展を開催します。当館では、これまでも静岡県にゆかりのある現代美術の作家達を様々な機会で取り上げてきましたが、静岡の作家が主となる企画展は八年ぶりとなります。

前号の『アマリリス』に掲載した研究ノートでも触れたように、天地耕作は当館とゆかりのあるアート・コレクティブです。彼らは、当館県民ギャラリーで開催された「A-Value」展に、天地耕作を開始する以前と以降を合わせて計三回参加し、その内の一回は美術館の裏山を使うものでした。また、三名は、後に天地耕作と名づけることになる活動を考えている頃に、川俣正が旧駿河銀行袋井支店の建物で実施した《袋井駅前プロジェクト》の制作に参加していました。[1] 村上誠は、プロジェクトへの参加が転機となったと述べています。[2] このプロジェクトの写真やマケットを、本展と同時開催の収蔵品展「静岡の現代美術と１９８０年代」展に出品します。

天地耕作の最初の制作は、彼らの所有する地所やその近辺で行われました。こうした野外での作品制作は、一九六〇年代から始まるアースワーク等と呼ばれる動向と共通点があると言えます。一方で、天地耕作の関心は、遙か遠い過去に向けられていました。山本が述べているように、「北部遠州奥三河は伝統芸能の宝庫」[3]であり、折口信夫をはじめとする民俗学者らが、何度も訪問した地域です。都市部と異なり、現代美術が発表されるような場所ではありませんでしたが、別の観点から捉えることにより、ある意味で豊かさが逆転することになります。そして、彼らはフィールドワークと称して、伝統芸能や遺跡をめぐるということを継続して行いました。

個々の作品について触れるなら、右記のような関心から、山本裕司の《氏神の祠》は、彼が住む集落にある祠の前で制作されたものでしたし、村上誠と渡による《辻》（図１）は、サンカと呼ばれる、かつていた山住みの人々へ向けたメッセージが意図されたものでした。また、一九九一年からは、作品を舞台にパフォーマンスを行うようにもなります。やはり伝統芸能への関心が反映されたもので、最初のものは音による表現を重視していましたが、それ以降は身体表現の要素も強まり、儀式のようなパフォーマンスを行いました（図２）。そして、作品には火が放たれ、破壊されました。このように、彼らの作品は放置されたり、破壊されたりし、後には残らないものでした。ここでご紹介したような制作やパフォーマンス、フィールドワークにより、天地耕作は、生や死、幅広い意味での表現といった、根源的なテーマに迫りました。

本展では彼らの活動を写真や映像などで辿るとともに、当館裏山では、二〇〇三年の未完となっていたプランが二〇年の時を経て実現されます。天地耕作の活動に触れることのできる貴重な機会となりますので、ぜひご覧ください。

（上席学芸員　植松　篤）

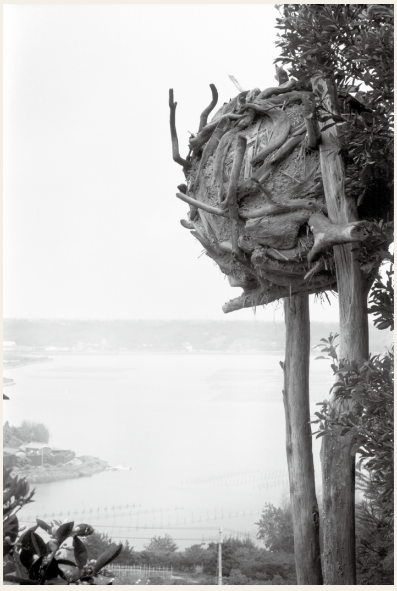

図１　村上誠・渡《辻》1988-89年　旧引佐郡細江町

図２　「パフォーマンス《身体遊戯》での山本裕司」1994年　旧浜北市姥ヶ谷

1　このプロジェクトは、この赤レンガ造りの建物取り壊しの際に実施された、大杉弘子の前衛書の展覧会や、コンサートやシンポジウムを含む、「赤レンガファイナル」の一環で実施されている。

2　村上誠、村上渡、山本裕司（記事名無し、対話の記録）『耕作だより』七号、一九九〇年七月、頁記載なし。

3　山本裕司「天地耕作計画……湖と山を巡る現代美術のフィールド・ワーク」『耕作だより』一号、一九八八年一〇月、頁記載なし。

収蔵品展

静岡の現代美術と1980年代

2024年２月10日（土）～４月７日（日）

この度の収蔵品展は、「天地耕作 初源への道行き」展の関連企画として、コレクションを中心に、静岡にゆかりのある現代美術作品と、天地耕作が活動を始めた一九八〇年代を中心とした同時代のアートシーンを示す作品をご紹介します。

天地耕作が活動を開始した一九八〇年代は、様々な美術の動向がありました。絵画が復権してニューペインティング等の名称でメディアを賑わし、オリジナリティを批判し、既存の作品を流用するシミュレーショニズムなどが存在感を放ちました。そのほか、いまでは作品形態の一ジャンルとして認知されている、空間的な展示全体を作品と捉える、インスタレーションといった概念がこの頃に市民権を得るようになるなど、素材や発表形式においても、以前にも増して多様化が進みました。

また、美術の環境に目を向けるなら、日本の同時代の美術が、次々に海外に紹介されるようになった時代でもあります。例えば、本展で作品を展示する宮島達男や森村泰昌は、一九八八年、ベネチア・ビエンナーレのアペルト部門に出品し、国際的な評価を得ました。宮島は、ＬＥＤのデジタルカウンターを用いた作品で知られ、森村は西洋の美術などに扮したポートレート写真で知られています。

企画展との直接的な関連では、川俣正《袋井駅前プロジェクト》（図１）がかすがいとなります。川俣は、制作するプロセスに焦点を当てた仮設的なプロジェクト型の作品を、一九八〇年代前半から展開していました。作品自体も興味深いですが、川俣を招へいしたのが、地域の有志による実行委員会（企画、実行委員長は書家の大杉弘子）という点も特筆すべきものがあります。

この時代の静岡県内における美術の動きは前号で一部紹介しましたが、本展では、作品制作のみならず、企画においても精力的に活動した長船恒利や白井嘉尚の実作品に触れていただきます。それより前の時期の動向としては、一九六〇年代から一九七〇年代にグループ幻触として活躍した作家らの作品もご紹介します。丹羽勝次の《NO HOOKS》（図２）は昨年、《箱シリーズ'68》は一昨年に修復を終え、良い状態でご覧いただけます。その他にも、飯田昭二の鏡を使って視覚を欺く立体作品や、鈴木慶則のだまし絵、前田守一の遠近法を逆手に取った作品などを出品する予定です。

右記で取り上げた、静岡で制作をしていた作家以外にも、制作拠点としては県内ではありませんが、当県出身の様々な年代の作家を取り上げます。戦後、社会的な出来事を描くルポルタージュ絵画により頭角を現した中村宏は、美術史上で重要な位置を占めており、外すことのできない存在です。他方、二度の渡米をし、抽象絵画を展開していった清川泰次は、中村と対照的な画家と言えるでしょう。後の世代の依田寿久は、一九六六年にアメリカに移住し、抑制された抽象表現で知られるようになります。近年の作家では、国際的な評価がますます高まる石田徹也の絵画や、美術史をふまえながらも、従来とは異なる画材を用いて絵画を制作している大庭大介の作品を展示します。

時代や地域でその美術を一括りにすることはできませんが、一九八〇年代の静岡の美術を、前後の時代や同時代から眺める機会となります。企画展とあわせて、様々な角度から作品を楽しんでいただければ幸いです。

（上席学芸員　植松　篤）

図１　川俣正《袋井駅前プロジェクト1988》1988年

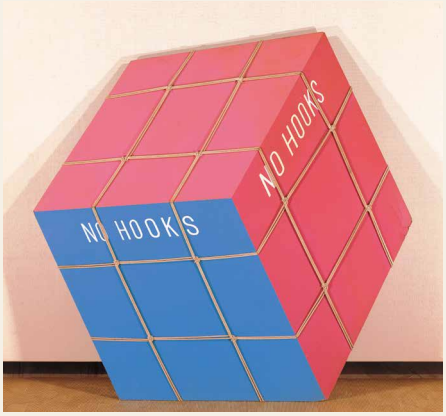

図２　丹羽勝次《NO HOOKS》1968年

中村彝（つね）宛曽宮一念書簡について

主任学芸員　喜多孝臣

はじめに

今夏より洋画家曽宮一念（一八九三―一九九四）関係資料を当館でお預かりしている。本資料群は、一九一二年（明治四五）から一九七七年（昭和五二）までの多年にわたって綴られてきた一四五冊の日記や、一九二九年（昭和四）から一九八五年（昭和六〇）までの七〇冊のスケッチブック、および曽宮の多彩な交友を物語る五百点以上の封書や葉書によって構成されている。

これらの資料は、もともとは曽宮一念のご息女・曽宮夕見氏によって保管されていたものであり、二〇〇〇年からは、曽宮一念の晩年のインタビュー集『画家は廃業―98翁生涯を語る』（曽宮一念著、静岡新聞社、一九九二年）をまとめた江﨑晴城氏に託されてきた。江﨑氏を中心に二〇一六年（平成二八）に曽宮一念研究会が立ち上げられ、同研究会によって本資料は整理調査がすすめられた。同会による研究の成果の一部は、これまで『没後二五年 曽宮一念展』図録（鹿児島市立美術館ほか、二〇一九年）や『曽宮一念展　朽ちることなき心象風景』（駿府博物館、二〇二〇年）の年譜や作品解説、日記の翻刻によって公開されている。

江﨑氏には、かねてより当館の展覧会活動にご支援を賜ってきた。このたび、江﨑氏より曽宮の顕彰を続けてきた当館の活動に役立てることをご希望頂き、本資料群をお預かりする運びとなった。

曽宮は日本の風土に根差した詩情豊かな風景画を探求した洋画家として知られている。彼は日記に、日々の出来事や雑感を書き留めるだけではなく、旅先での写生の様子や絵画の構想についても書き記した。スケッチブックとともにこれらの日記の調査を進めれば、作品個々の具体的な制作背景や曽宮の創作の過程に迫ることが期待できよう。また、書簡の差出人の名を追えば、安井曽太郎、梅原龍三郎、小林和作、坂本繁二郎、須田国太郎など、二科会、独立美術協会、国画会と在野の美術団体で作品を発表してきた曽宮の歩みを映し出し、錚々たる個性的な洋画家たちの名を幾人も見出すことが出来、ここから曽宮と彼らの交流の実相を探ることができる。

洋画家として確かな足跡を残してきた曽宮による本資料群は、曽宮個人の研究は言うに及ばず、様々な観点から活用しうる日本近代美術史研究上においても貴重な資料群といえる。当館での調査はまだまだ端緒についたばかりであるが、本小文では、この資料群のなかから曽宮が洋画家中村彝に宛てた書簡の一部を紹介したい。

中村彝宛曽宮一念書簡について

曽宮は東京美術学校西洋画科を卒業した一九一六年（大正五）から、二科展にて樗牛賞を受賞し、画家として大きな飛躍の年となった一九二五年（大正十四）の前年まで、先輩画家である中村彝と親しく交わっていた。その交友のありようについて曽宮は「私は中村君を兄のやうに慕ひ、中村君も弟の様に私を愛してゐる。勿論中村君の藝術に尊敬を拂つてゐる事は云ふ迄もない」と表現し、「私は何も彼も中村君に相談しなければ気が済まなかつた」と記している。[1]

二十代から三〇代のはじめにあたるこの時期、曽宮は自分の道を見出すために煩悶の日々を送っていた。人生の岐路における大きな選択を重ねるなかで、曽宮は、「兄のやうに慕」った彝を大きな指針とし、助言を求めていたようだ。その彝との交流の内実を知るうえで、書簡はまたとない資料となるが、本資料群には曽宮宛の彝書簡は残されていない。[2]だが、曽宮から彝に宛てた書簡については、十一通の封書と六通の葉書が確認されている。

これらの書簡は、いつ書かれたか不明なものもあるが、その大半は一九二四年（大正十三）に差し出されている。彝は同年十二月に長年闘病していた結核で逝去しているから、彝の最晩年のやりとりということになる。この年、彝は三七歳。曽宮は三一歳であった。

ここでは、「Taeshow zū sannin Rogugazu moega Ezuemo」[3]と封筒裏に記された書簡を見てみることとしたい。その記載から「大正十三年六月六日」の書簡と推定される。封筒には便箋六枚が入っているが、その便箋の種類や内容から二通の書簡が一つに収められたと判断できる。紙幅の都合からその短い方、便箋二枚分の書簡を翻刻紹介する。[4]

おばさんによろしくいってくれろ。おばさん又、おあそびに（ナンテいふとしかられさうだ）おみまひに来たまへ。こっちの大明神もなかなか〳〵御利益があるから。

先日は本をそれから玉子をありがたう。大へん御しんぱいをかけてすまない。早くよくなりたいものだ。この三日程熱がさが

図1　封筒表

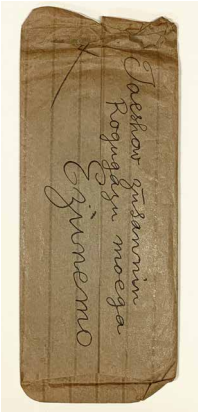

図2　封筒裏

った。めしも少しくへて来た。今日などはねてゐてタイクツでこまった位だ。然しまだ起きる力はナイカラ、メチャはせぬから御安心下さい。

光風会へは大分ゆきたかった。こんなことになるなら招待日にいって来てしまへばよかったものだ。大明神もヘト〳〵にナッたろう。然しあの会は全く無個性のブルジヨア趣味のあつまりだ。おれはこの頃は會員様にしてくれても、ことはり度くなった。曰く、加藤静児曰く大野隆徳大将が岡田シエンシェイ。おれはまだ小さい。あいつらの方がえらいところもあろう。然しおれはあゝいふ風に育ちたくないのだ。あの仲間には入るとやっぱり安おしろいの香に染まる。ことはってをくがおれはシャクにさはてさう言ってるのぢゃない。ほんとにアンナ仲間と一しょになるのがコワクなったのだ。

大明神ノお話しがきいたいナ。この発熱の状態が二週間もつゞけば一人前とみなして出勤スル。その頃大明神がブッダオレてゐたりせぬやうにせよ。

普明照世間！

病気はたいくつだから版コを穴があく程よくみる。ふだんはおれはセッカチだから、とてもゆっくりと一枚〳〵みてゐられないと大般若経を読む形式でバラ〳〵〳〵とみてしまふがねてゐるとよくみる。みてる間は一寸オモクレイが結局ハンコだ。垣の間からしめりがちな向ふの丘が僅かにみえる。白い人間がその中に動いてゐる。これにしかず。然し、折角オコラナイデ又ハンコをかしてください。

一念

中村大明神殿

図3　便箋1

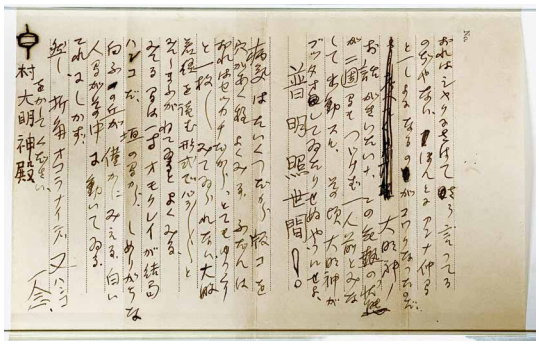

図4　便箋2

本書簡の中で、曽宮は彝のことを「大明神」と呼ぶ。おどけた風のあるこの尊称一つとっても、二人の間に冗談を言い合える親密な関係性があったことがうかがえる。彝は結核で臥せっていたが、その彝が曽宮の体調を気遣い、卵を差し入れするというのもなんとも愛情深いやりとりである。

曽宮は、東京美術学校在学中の一九一三年（大正二）から光風会に出品していた。光風会は、黒田清輝らによる白馬会の流れを組む美術団体であり、穏健な写実的作品が主流を占めていた。ここで曽宮は、この団体の道行きとの決別を望み、信頼する彝にその熱い心情を吐露している。彝からどのような助言があったかはわからないが、その後、曽宮は個性的な絵画が認められた二科会や日本的油絵の牙城となる独立美術協会に参加するなどして、光風会を離れていく。本書簡では、その後の画家の生涯を決めることになる大きな選択肢の前で悩む曽宮の姿を認めることができる。

作品には選択した結果だけが残される。何をどのように描くのか、多くの選択肢のなかで格闘する作家の姿をそこから読み取ることは難しい。しかし、こうした資料にあらわれる選択に揺れる作家の生身の姿は、多くの観者と作品の距離を近づけてくれるものではないだろうか。

本資料群の当館での調査はまだ始まったばかりである。今後は展覧会のなかでもその成果をお届けできるよう調査を進めていきたい。

1　曽宮一念「兄のやうな気持」『中央美術』六二号、一九二〇年十一月、一六〇頁。

2　曽宮に宛てた彝の書簡は、彝の遺稿や書簡をまとめた『藝術の無限感』（中央公論美術出版、一九八九年）のなかで、曽宮と妻綾連名宛の書簡も含め、五通紹介されている。

3　当時、曽宮と同じく彝のもとに出入りしていた鈴木良三は、曽宮が「ソメエ、エヅネモ」と自称していたことを記している（鈴木良三『中村彝の周辺』中央公論美術出版、一九七七年、一四八頁）。「Ezuemo」は「エズネモ」のことだろう。

4　翻刻にあたって、可読性を考慮し、句読点を補い、改行も適宜改めた。

本の窓

加治屋健司 著
『絵画の解放　カラーフィールド絵画と20世紀アメリカ文化』
東京大学出版会
二〇二三年

一九五〇年代に登場し一九六〇年代に展開したアメリカのカラーフィールド絵画を代表する五人の画家を取り上げ、同時代の展覧会評や批評などとの関係性を考察した研究書です。クレメント・グリーンバーグや、マイケル・フリードら美術批評家と、ヘレン・フランケンサーラーやモーリス・ルイスら画家との関係は双方向的であり、個々の批評家のスタンスも様々だったことが考察されています。交際していたフランケンサーラーとグリーンバーグとの相互の影響関係を言説や記録から丹念に辿っていく下りは特に興味深く、両者の会話がきっかけとなり、グリーンバーグがポロック作品の解釈を変更したとする指摘からは、批評もまた創造的な行為であることに気付かされます。当館ではモーリス・ルイスとフランク・ステラの作品を所蔵していますが、言説を知ることにより、作品鑑賞とはひと味違う次元での作品の理解を深めてくれます。

（学芸課　上席学芸員　川谷承子）

#考えないようにする

企画総務課主幹　後藤健志

今年度から企画総務課に配属になりました後藤と申します。二十年ぶりに当館への復帰となりました。施設管理などを担当しておりますので、よろしくお願いします。

美術館への異動が決まってから、やってみたいと思った目標が三つあります。

そのうちの一つは当館を美術関連以外の分野できれいな映像作品として残し、今まで来たことのない人達へのPRにつなげることです。映画の撮影依頼はそう滅多に来ないし、と思っておりましたが、意外にもその機会は早く訪れました。

皆様は、今年の八月に乃木坂46　五期生メンバーによる新曲「考えないようにする」のミュージックビデオ（MV）撮影が当館ロダン館を含む静岡市内にて行われたことはご存じでしょうか。

八月十八日に乃木坂公式YouTubeチャンネルにて公開されるや、翌日から県内外問わず、たくさんのファンの方が、聖地巡礼と称してロダン館を訪れています。

ライトアップされた考える人と天井に富士山模様が浮かぶロダン館

多くの聖地巡礼者が訪れていることから、地元新聞やテレビ局からの取材もあり、ニュースで目にした方もいらっしゃるのではないかと思います。

ファンの方達は、推しメンバーのグッズと一緒に「地獄の門」や「考える人」などのMV出演作品の写真撮影を行い、楽しんでいる姿が見受けられます。推し活の楽しい時間の中でロダン作品も一緒に堪能し、美術館のファンにもなって頂けたら、と期待しています。

また、MV撮影は平日閉館後の夜に行われました。そのため、映像の中では普段見ることができないライトアップされた夜のロダン彫刻を見ることができます。まだMVをご覧になっていない方には、是非写真のような光沢の陰影がはっきりしたロダン彫刻を動画の中でお楽しみ頂きたい、と思います。

さて、一つ目の目標は早くも叶えることができました。果たしてあと二つの目標は実現することができるのか。またいつかの機会に結果を報告することができたら幸いです。

利用案内

開館時間：10:00～17:30（展示室への入室は17:00まで）
休 館 日：毎週月曜日（月曜祝日の場合は開館、翌火曜日休館）、年末年始
※その他、夜間開館や展示替等による臨時休館を予定しています。
　詳細はウェブサイト等でご確認下さい。

アクセス

◎ＪＲ「草薙駅」県大・美術館口から静鉄バス「県立美術館行き」で約６分
◎静鉄「県立美術館前駅」から徒歩約15分またはバスで約３分
◎東名高速道路　静岡IC、清水ICから約25分　日本平久能山スマートICから約15分
◎新東名高速道路　新静岡ICから約25分

ウェブサイト：https://spmoa.shizuoka.shizuoka.jp

※イベント等は都合により変更になる場合があります。

〒422-8002　静岡市駿河区谷田53-2
企画総務課／Tel 054－263－5755　Fax 054－263－5767
学　芸　課／Tel 054－263－5857　Fax 054－263－5742

静岡県立美術館
Shizuoka Prefectural Museum of Art

つながる、次へ

2024年度企画展年間スケジュール（予定）

テオ・ヤンセン展
4月13日(土)～7月7日(日)
オランダを代表する現代アーティストの国内巡回展、いよいよ静岡へ上陸。

カナレットとヴェネツィアの輝き
7月27日(土)～9月29日(日)
18世紀ヴェネツィアの都市景観図（ヴェドゥータ）の名手カナレットをご紹介する日本初の展覧会です。

無言館と、かつてありし信濃デッサン館展
10月12日(土)～12月15日(日)
ともに長野県上田市に位置する、戦没画学生の絵画を収めた〈無言館〉と、同じく「夭折」した若者の絵を集めた〈信濃デッサン館〉をご紹介します。

生誕140年記念　石崎光瑤
2025年1月25日(土)～3月23日(日)
明治後期から昭和初期に京都で活躍した石崎光瑤。その絢爛、濃密な花鳥画の魅力を紹介する大回顧展です。

伊藤若冲《樹花鳥獣図屏風》（右隻）静岡県立美術館蔵
来年度は、「石崎光瑤」展会期中の収蔵品展にて展示予定です。

静岡県立美術館ニュース『アマリリス』No.152　編集発行：静岡県立美術館　2023年12月21日　印刷：文光堂印刷株式会社